日本小児看護学会　第26回学術集会ご案内

学術集会テーマ：つなぎ 活かす 小児看護の現在と未来 ―Lincage, Coordination and Development―

【会　　期】2016年7月23日（土）～24日（日）
【会　　場】別府国際コンベンションセンター　ビーコンプラザ
【演題募集期間】2016年1月8日（金）～2月22日（月）正午
【参 加 費 用】会　員（事前）：10,000円、会　員（当日）：12,000円 ／ 非会員（事前）：11,000円、非会員（当日）：13,000円
【プログラム（1日目）】
会長講演：「小児看護の現在を見つめ、未来の姿を創造する」
高野　政子（大分県立看護科学大学　小児看護学研究室　教授）
特別講演：「米国における小児のNPとCNSの活動」
美智子・レンデンマン氏（Ph.D,CPNP）
特別企画：「東日本大震災から5年－看護者として子どもを守るということ－（仮）」
テーマセッション、一般演題（口演・示説）、総会、懇親会
【プログラム（2日目）】
シンポジウム：「小児在宅療養を支援する新たな看護専門職の連携」
坂本　すが（日本看護協会会長）他
教育講演：「子どもの食物アレルギーと健康支援」
西間　三馨氏　国立病院機構南福岡病院名誉院長
テーマセッション、一般演題（口演・示説）、ランチパフォーマンス
【第26回学術集会 URL】http://www.jschn26.jp　から画面表示に従って登録して下さい。
【事　務　局】＜学術集会事務局＞ 大分県立看護科学大学小児看護学研究室
〒870-1201　大分市廻栖野2944-9　E-mail：jschn26@gm.oita-nhs.ac.jp
＜運営事務局：演題登録・事前参加・学会運営に関するお問い合わせ＞
株式会社　マイダスコミュニケーション
〒870-0844　大分市古国府1155-1　E-mail：jschn26@maidas-net.co.jp

教育委員会から研修会のお知らせ

近年、子どもの在宅支援の動きが活発になっています。会員それぞれが所属において役割をとることを求められていると思います。子どもが早期に退院し在宅移行する中で、医療施設において、あるいは地域において、多職種と連携しながら看護者は基本的にどのような役割が必要なのか学ぶ研修会を企画しました。昨年度に引き続きのテーマですが、皆様のご要望にお応えし、今年は1日間の研修です。なんとなくわかっているけど、在宅支援ってどう行っているの?とか、今行っていることがどこにつながっていくの?という皆様、また実践しているけれども情報交換の場を持ちたいという皆様、多くの会員の方のご参加をお待ちしています。

「施設から在宅への移行支援を学ぼう ―NICUから在宅への支援を通して―」

【日　時】2016年2月6日（土）9:30-16:00
【場　所】首都大学東京荒川キャンパス　東京都荒川区東尾久7-2-10
【参加費】会員2000円　非会員3000円
【プログラム】（変更の可能性があります）
1．現在の小児療養における支援体制（制度）
講師：依頼中
2．NICUにおける在宅療養への意思決定支援と退院支援
講師：亀山千里（土浦協同病院　小児看護専門看護師）
3．小児病棟における在宅療養への意思決定支援と退院支援
講師：井出由美（昭和大学病院小児医療センター　小児看護専門看護師）
4．施設から地域への橋渡し
講師：牧内明子（長野県立こども病院　患者支援・地域連携室師長）
5．小児の在宅療養支援の実際
講師：依頼中
6．グループワーク・発表　＊随時詳細をHPに掲載します。

理事会からのお知らせ

日本小児看護学会第25回学術集会開催時に、日本小児看護学会名誉会員証授与式ならびに日本小児看護学会研究奨励賞授与式が執り行われました。

新たに名誉会員になられた方々

川出富貴子氏、山本匡子氏

2014年度研究奨励賞受賞論文

2013年発行の日本小児看護学会誌22巻2号と3号、2014年発行の23巻1号に発行された原著及び研究報告14編の中から、選考の結果、下記1編の受賞が決定しました。

下野純平（2013）．在宅重症心身障害児の父親が父親役割を遂行するための調整過程.日本小児看護学会誌, 22(2), 1-8.

訃　報

平成27年4月17日に、名誉会員　瀬谷美子氏がご逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。

◆ 編 集 後 記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター47号をお届けします。ニュースレターでは、学術集会や理事会・委員会活動・会員に関する情報を掲載しております。お忙しい中、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。今年度6月より、武田淳子新理事長の下、新役員体制による学会運営が始まり、広報委員会も新たなメンバーとなりました。ニュースレターや学会ホームページ等を通して、最新の学会活動を会員の皆様と共有し、子ども、家族、小児看護に関する情報発信に努めて参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

広報委員会メンバー
委員長：奈良間美保
委　員：上原章江、竹内幸江
新家一輝、堀　妙子
丸　光恵

2015年11月　第47号

一般社団法人 日本小児看護学会
Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第25回学術集会を終えて

学術集会会長　中村 伸枝
（千葉大学大学院看護学研究科）

平成27年7月25日（土）、26日（日）に、千葉市幕張にある東京ベイ幕張ホールにおいて「小児看護の目的（ゴール）－子どもと共に“いつ”“何を”めざすか－」というメインテーマで学術集会を開催しました。猛暑の中、1749名という多くの方々にご参加いただき、心より御礼申し上げます。

本学術集会の打診があった2年半前の時点で、幕張メッセにはこの時期既に空室がありませんでしたし、日本看護協会の学術集会に小児看護領域がなくなったこともあり参加者が増加したことで、コンパクトな東京ベイ幕張でどのように運営できるのかが本当に心配でした。それでも、大きな混乱も事故もなく無事に終了できましたことに、参加者の皆様、企画委員、実行委員、ボランティアの方々、そして東京ベイ幕張のスタッフの方々のおかげと、深く感謝申し上げます。

25回目を迎えた本学術集会では、特別講演としてお茶の水大学基幹研究院人間科学系の菅原すみ先生に「クオリティ・オブ・ライフと子ども期の発達―胎児期から青年期まで―」のテーマでご講演頂き、教育講演では東京大学大学院医学系研究科の芳賀信彦先生に「生涯を見据えた肢体不自由児への医療と支援」のテーマでご講演頂きました。学会の最後には、シンポジウム「子どもと共に小児看護の目標（ゴール）を見つめよう～病気をもつ子どもたちからのメッセージ～」を行いました。いずれもたくさんの方々のご参加を頂き、多くの学びを得たことがアンケートにも示されていました。

菅原先生の特別講演では、「子どもの幸せ」をより高めるために、胎児期から青年期に至る膨大な測定データを得て、説得力のある「子ども期の発達に重要な要件」を示してくださいました。疾患の有無によらない小児、そして養育者に必要なことを現代社会の情勢をふまえ様々な観点から考える機会となりました。そして、菅原先生の熱く流暢な語りと、予定時間を“1秒01”過ぎたところで終了したプレゼン力には脱帽でした。

芳賀先生の教育講演では、「生涯を見据える」ための重要なポイントを豊富な具体例を交えてお話し下さいました。この中で、将来の自立歩行が実用的でなくても、小児期に歩行訓練をしたほうが、その後に、より自立した生活をしていたデータや、将来の工学テクノロジーの進歩を見据えた子どもへの支援が心に残りました。子どもの意欲に秘められた可能性、成長発達の総体の複雑さを感じました。ご講演後には、これまで臨床で関わられた方々の輪ができ和やかな雰囲気に包まれました。

また、シンポジウムでは子どもからのフォトメッセージの後、当事者の立場から櫻井誠一氏、臨床心理士の立場から榎本淳子氏、小児の在宅看護を支える専門看護師の立場から行田菜穂美氏にご登壇頂き、会場の参加者の皆様とディスカッションを行いました。参加者の方々がそれぞれの立場で活用していって下さることと思います。

昨年度のアンケート結果を受けて、本学術集会からテーマセッションを公募したところ、16ものセッションが集まりました。せっかくの企画ですので、1会場で2セッションの開催や、急遽48階の展望会場（?）を借りて、全てを採用させて頂きました。参加者も会場も熱（暑）く、有意義な交流を図ることができたと思います。継続して行われている3つのエキスパートパネルや、昨年からの企画である共催セミナー「小児のてんかん　診断から治療まで」、国際交流委員会企画「Preventing Childhood Obesity in Asia」、ランチパフォーマンス「親の会からの発信」も、多くの方々にご参加を頂きました。また、本学術集会では、196題の一般演題（口演：74題、示説：162題）も発表され、活発な意見交換が行われました。

学術集会の規模が大きくなってきたことは、小児看護に関心を寄せる実践者・教育者・研究者が増えてきたと考えられ、大変うれしく思います。一方で、学術集会を開催するための様々な手続きや調整を、よりコンパクトにしていく必要性も感じました。本学術集会でご協力頂いた全ての方に深謝し、第26回の学術集会にバトンを渡します。

▲大学院生、修了生と

▼シンポジウム

日本小児看護学会に参加しての学び

■ 森田　かおり（千葉県こども病院）

日本小児看護学会の心理・精神部門の発表の場に参加し、当病院と同様に、精神科の専門病棟ではなく一般小児病棟において小児精神看護を行っている病院があることを再認識しました。病棟看護師、外来、ソーシャルワーカーが連絡をとり、小児の症例毎に入院中や退院に向けた看護支援を行っている現状を知ることができました。そして、看護支援を実践していきながら、子ども、家族と信頼関係を構築していき、子どもと家族の関係性やそれぞれの気持ちについて情報収集を行うこと、気持ちに寄り添いながら時間をかけて、看護支援を行っていく難しさを感じました。

看護の対象者が子どもであるから、大人である看護師がいろいろな手をさしのべなければいけないと思っていたところがありました。しかし、今回の第 25 回学術集会のテーマである「小児看護の目標―子どもと共に“いつ”“何を”めざすか―」の視点で考えてみると、子どもの疾患の受け入れ時期などを見極めていき、その子どもの思いなどに、どのように答えることができるのか、答えることができないのならば、子どもと一緒に考えていくことが、病気をもち、病気と共に成長していく子どもへの援助のひとつではないかと気づかされ、考えさせられる機会となりました。今回の気づきや学びを今後の看護に役立てていきたいと思います。

「リレートーク」内田雅代さん（長野県看護大学）

自己紹介

出身は徳島県。実家は旅館で人が大勢いる中で育ち、静かな家庭にあこがれたりもしましたが、わいわいガヤガヤはけっこう好きかもしれません。幼い頃から専用の台に乗り好んで皿洗いをしていたようで、今でも家事の中で食器洗いだけは得意で、ふとアイデンティティを感じたりもしています。高校・大学は徳島市内で一人暮らし、大学時代の同級生とは『花の５期生』と称し、年１回の同窓会を楽しんでいます。

看護師になったきっかけ

大学を選ぶ時に教員にも看護師にもなれ将来自活できる道を意識したこと、そして、大学時代に『看護とは何か』を熱く語る同級生や『看護はすばらしい』と話す先生方と、看護実習での自分自身の体験とのギャップを感じ、「ホントにそうなの？」と看護師になって自分で確かめてみようという気持ちで就職しました。

新人時代の思い出

大学卒業後 1 年目に、淀川キリスト教病院の新生児室で小さな赤ちゃんの看護をしました。当時はディベロップメンタルケアの考え方はなく、昼夜問わず明かりがこうこうと照らされ、無呼吸の赤ちゃんの呼吸を回復させるために、保育器をたたいたりしていました。先輩看護師が優しく子どもに声をかけていたのが印象的で，最初は気恥ずかしく、でもそのうち声をかけられるようになりました。保育器の中の小さな赤ちゃんにミルクを飲ませるのにも慣れた頃、「早く飲んで」と焦って飲ませようとするとなかなか飲んでくれず、「まあいいか！」と気持ちを切り替えゆったり関わると飲み始め、子どもが私の気持ちを感じとっているのを実感しました。やりとりしながらサインを把握する大切さや子どもの力を学んだような気がします。

小児看護の魅力

看護師としてのスタートは新生児室でしたが、筑波大学病院では、小児病棟・軽症病棟・重症病棟をローテーションし大人の看護も体験しました。その後、千葉大学看護学部助手として小児看護学分野で、吉武香代子先生・兼松百合子先生の元で助手として、教育・研究に携わる中で子どもを理解する・尊重することを再確認しました。子どもの生活環境の研究や小児糖尿病外来での看護活動に参加させて頂き、“当事者である子どもとその親”にどのように関わるとよいかを模索し、子どもの世界を感じとりながら，親の状況を理解しようと関わることで見えてくるものがあることに気づきました。今を精一杯生きている子ども達の力を感じ、私自身も勇気づけられる中で、親と一緒に子ども達の今とこれからを支援できる看護師でありたいと思うようになりました。

内田先生

ストレス解消法

眠ること、好きな物を食べること、身の回りの雑多な買い物をすること、思いついたことを書きとめることなど、その時々の自分のしたいことをすることで気分転換をしています。家族や周囲に迷惑をかけながら生活しています。

後輩達に期待すること

看護の知識や技術を身に付け子どもや家族の状況をアセスメントし予測する力を高めるとともに、対話ややりとりを通して子どもや家族と一緒に（当事者から学びながら）ケアを創っていくことが大切であると思います。自分が気づいた倫理的問題に対しては、よりよい状況を創り出す一歩を踏み出す勇気をもち、粘り強く周囲の人と話合いながら取り組んでほしいと思います。看護師としての好奇心を大事に、発揮できるように、看護師自身も支援される環境作りが課題ではないかと思います。

バトンを受けて欲しい人 濱中喜代さん

理事長挨拶

一般社団法人日本小児看護学会　理事長
武田　淳子

本学会が『一般社団法人日本小児看護学会』として新たなスタートを切ってから 2 年余が経過した 2015 年 6 月より、新体制での理事会がスタート致しました。2017 年の社員総会・会員集会までの 2 年間の任期となります。前理事体制では、まさに任意団体から一般社団法人への移行期の中で「小児看護に関する実践、教育及び研究の発展と向上に努め、それらを通して子どもの健康増進に寄与する」との目的のもと、円滑な事業の促進とさらなる学会活動の充実を図るために常設委員会の拡充を図るなど、法人としてのしっかりとした基盤を築いて頂きました。

今期は委員会等の組織体制に特に変更はなく、学会の庶務･会計事業を担当する「総務委員会」と､「編集委員会」､「広報委員会」､「教育委員会」､「学術・研究推進委員会」､「倫理委員会」､「小児看護政策委員会」､「診療報酬検討委員会」､「災害対策委員会」､「国際交流委員会」の９つの常設委員会で活動を行っていきます。本学会は、1991 年に『日本小児看護研究学会』として設立されてから今年で 25 年目を迎え、約 2000 名の会員からなる大きな組織となりました。今期も、本学会の目的である「子どもたちの健康増進に寄与する」ことをめざして、効率的で健全な運営を心掛け、より一層委員会活動を充実、活発化させていくことはもちろんのこと、その成果を会員お一人お一人の日々の実践や教育、研究活動へと確実に還元していくことが重要と考えています。

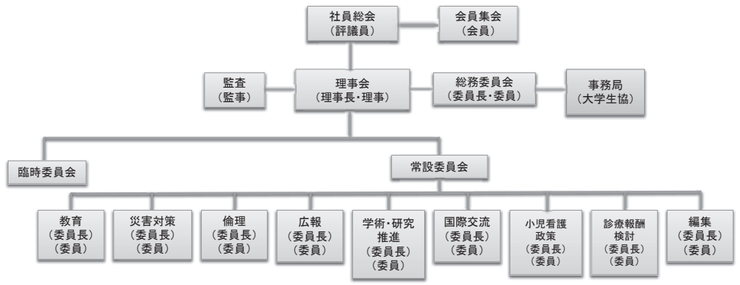
具体的には、今年度の事業としてこれまで継続的に行ってきた委員会活動に加えて、学会誌の電子投稿システム導入に向けての対応（編集委員会）、小児看護学の基礎教育から新人期の教育ガイドライン作成に向けた準備（教育委員会）､「子どもを対象とする看護研究に関する倫理指針」の作成と啓発活動（倫理委員会）､「健やか親子 21（第 2 次）」としての活動と学会員への周知（小児看護政策委員会）、平成 28 年度・30 年度の診療報酬改定に向けて要望書等の作成及び関連団体との連携（診療報酬検討委員会）、災害ネットワーク作り（災害対策委員会）、国際シンポジウムの開催（国際交流委員会）などを計画しています。また本学会の主要な事業のひとつである学術集会の開催のほか、地方会の開催（教育委員会）や学術集会におけるテーマセッションならびにエキスパートパネルの開催、各種研修会の開催なども活発に行っていきます。このような法人としての活動の実態や成果については、広報委員会により、できるだけタイムリーにホームページやニュースレター等を通して可視化し、発信していきたいと考えています。またホームページの充実や学術集会・研修会、啓蒙活動等を通して、広く社会に向けて積極的に発信していくことも、法人としての重要な責務と考えています。

武田先生

子どもや家族を取り巻く社会情勢や保健・医療・福祉・教育等の環境の変化に迅速に対応しながら、「子どもの健康増進に寄与すること」を目的とする学術団体としての社会的役割を果たしていくためには、全国で活躍していらっしゃる会員の皆様のご支援、ご協力が欠かせません。会員の皆様には、あらゆる機会を通して、本学会の活動や運営の実態を常に注視して頂き、本学会の更なる充実・発展に向けて忌憚のないご意見を頂きたいと思います。また会員の皆様の日々の実践、研究、教育活動における成果を、学会誌や学術集会等の機会を通して広く発信して頂くなど、これまで以上に本学会を活用して頂けるよう、努力して参りたいと思っております。

会員の皆様のさらなるご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 日本小児看護学会組織図



理事会メンバー

総務委員会：武田淳子、日沼千尋、佐藤幸子、遠藤芳子
編集委員会：江本リナ
診療報酬検討委員会：日沼千尋
小児看護政策委員会：二宮啓子
国際交流委員会：中村由美子
学術・研究推進委員会：飯村直子
広報委員会：奈良間美保
倫理委員会：中野綾美
災害対策委員会：浅野みどり
教育委員会：平林優子
監事：草場ヒフミ、中村慶子